

土木学会四国支部「土木紀行」No.67(高知県)

「四万十川橋（赤鉄橋）」



写真1 清流に架かる赤鉄橋

高知県西部を流れる一級河川四万十川。「日本最後の清流」とも呼ばれるこの川の下流には、人目を引くあざやかな赤い橋が架かっている。橋梁名を四万十川橋（もしくは渡川橋）というこの橋は 1926 年（大正 15 年）に開通した。その見た目からか「赤鉄橋」とも称されており、むしろその愛称にて知られている場合が多い。

橋長は 507.2m、幅員は 5.5m となっていて、形式は写真 1 に写る 435.5m の区間が下路単純ワーレントラスであり 8 径間 53.645m、続く 71.7m の区間（写真 1 では手前側で見切れている）は鉄筋コンクリート単純桁であり 6 径間 11.5m となっている。ちなみに鉄筋コンクリート単純桁区間は 1936 年に伸長されたものである¹⁾。

この橋は 1946 年 12 月 21 日に発生した南海地震によって、橋脚が 3 基倒壊し、5 基傾斜トラスは 6 径間が落下したが、1948 年 8 月 21 日に復旧された。8 連のうち 2 連のみが新桁であり、その他は旧桁が使用されている。また、1968 年に両側に幅 2m の歩道が添加された²⁾ことで歩行者や自転車にもなじみの深い橋となっており、その歩道からは美しい四万十川の流れを楽しむことができる。



写真2 歩道から眺めた四万十川

また、歩道を歩いていると、そこにいくつかの種類の動植物の絵が描かれているのに気がつく。描かれているのはホタル、トンボ、アユ、タンポポなどと様々であるが、いずれも四万十川流域に生息していることから、四万十川にゆかりのある動植物を描いているのではないかと想像できる。

この橋が完成するまでは、四万十市（旧中村市）の中村地区と具同地区を結ぶ交通手段は渡船のみであり、当時は四万十川が増水すると交通手段がなくなってしまっていた。そんな中で渡船の転覆事故が発生し、死亡者も出てしまったことから、この橋の架橋への要望が強まったということである。完成当時は四国一の大橋梁であったこの橋は、地震の被害からの復旧、歩道の架橋、そして軽量化工事を経て現在の姿となっており²⁾、下流側に他の橋が架かった今もなお、同地区間の交通においておおいに役立っている。

さて、この橋の河川敷にはテニスコートや広場などがあるため、周辺の人々には親しみやすい場となっており、観光客が橋を写真に収めようと河川敷にて良いアングルを探している様子も見られる。さらに、夏の終わりには毎年、納涼花火大会が開催されていて、河川敷には出店や見物人が多く集まっており、これは地元の学生などにとっては夏休み最後の一大イベントともいえるものであるだろう。

塗装が薄くなってきた部分なども見受けられるが、まだまだその存在感は色あせてはいないはずである。近くを訪れた際は、ぜひ立ち寄ってみてはいかがだろうか。

参考文献) 1)歴史的鋼橋: T8-010 四万十川橋(渡川(ワタリガワ)橋)

<http://library.jsce.or.jp/jsclib/committee/2003/bridge/T8-010.htm>

2)中村市広報 2004年6月号 No.46

<http://www.city.nakamura.kochi.jp/gyosei/pdf/h16/kouhou06.pdf>

(高知高専専攻科 建設工学専攻 1年 谷田雄麻)

土木学会四国支部「土木紀行」 <http://doboku7.sakura.ne.jp/kikou/kikou.htm>

土木学会四国支部 <http://www.jsce7.jp/>



写真3 鉄橋の歩道



写真4 歩道に描かれたホタル